

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2007年3月

博士論文審査報告書

論文題目 日本語オノマトペとその教育

申請者氏名 三上 京子

主査 川口 義一 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 小宮 千鶴子 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 戸田 貴子 (大学院日本語教育研究科教授)

本論文は、その使用頻度や語彙としての重要性にも関わらず、従来の日本語教育では十分な学習や指導がなされてこなかった「オノマトペ」を対象に、①オノマトペ一般の本質と定義、②オノマトペアの辞書記述上の問題の特定、③日本語オノマトペの使用実態調査、④オノマトペの言語的特性とオノマトペ教育の方向性、⑤日本語教育のための「日本語基本オノマトペ」の選定とそのリソース化、の五つの問題について分析・考察・提案したものである。すべての研究が、究極には「日本語教育におけるオノマトペの学習と指導」に向かう指向性を有しており、日本語教育研究科の博士論文としてふさわしい目的を設定した研究になっている。

特に、注目すべきは、日本語教育の比較的早い段階からのオノマトペ学習・指導のために「基本オノマトペ 70 語」を選定したことで、その方法が日本語教育における基本語彙との意味的関連性に基づいているところから、意味論・語彙論の研究に資するものであるとともに、本研究自体もさらに語の共起性をめぐる広範な問題に発展する可能性があり、今後の研究の展開にも期待が持てる。

また、この「基本オノマトペア」のリソース化に向けて、その意味や用法の記述例を提供しているが、これは『コウビルド英語学習辞典』の記述方法を参考にして行われた、日本初の語義解説であり、辞書学の見地から見てもユニークな試みである。用法の記述も会話文脈の中でのことばの使われ方が明確になるようにするなど、新たな教材化に積極的に挑戦している。

なお、この教材化作業の一部は、国立国語研究所が行っている「E-JAPAN 事業」のインターネットとサイト「日本語を楽しむー表現豊かな擬音語・擬態語ー」において 2004 年度より公開中であり、サイトにアクセスした学習者や教師からさまざまなフィードバックを得ていることも、今後の研究の深化にとって貴重ながかりを確保できることを示している。

以上、本論文は、全体として、博士号を授与するにふさわしい水準の論文であると判断できる。

その上で、以下のような問題点を検討して、これ以降の研究の質を高める余地があるものと考えられる。

1. オノマトペの分類について、本論文では「くるり」のように「り」を伴うオノマトペがややゆっくりした動きを連想させるのに対し、「くるっ」のように促音を伴うオノマ

トペは動作が瞬間的であると述べている。確かに先行研究ではこのように意味的側面が強調されているが、促音を伴うオノマトペは、「り」の母音[i]が脱落し、後続する「と」の子音[t]に逆行同化した結果、派生した形であるという解釈もある（那須 1994）。このような音韻特徴は動詞の活用に見られる促音便（例：取った、乗って）とも共通している。つまり、オノマトペの語形生成には、意味的、音韻・形態的、統語的特徴が相互的に関与していることになる。つまり、意味と音声には関連性があり、また、文法と音声にも関連性があるということである。したがって、オノマトペの意味特徴、音韻・形態的特徴、統語的特徴による分類は実際には線引きが難しく、さらに踏み込んだ考察が望まれる。

2. オノマトペの使用実態調査では新聞記事・雑誌記事などジャンルの異なる資料を用いて分析が行われているが、オノマトペは話し言葉において頻繁に使われることから、今後談話資料を使って分析を進めると、より魅力的な研究になるのではないか。
3. 辞典類に採録されているオノマトペの調査に際しては、約 11,000 語を収録する『日本語を学ぶ辞典』（阪田雪子監修・遠藤織枝編集主幹・新潮社 1995）を資料として、中級後半以上の語彙も調べるべきであろう。
4. 先行する 8 種の基本語彙から得たオノマトペアを初級・中級・上級に分けているが、文化庁(1983)『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』の第一次水準約 3,600 語から選定したオノマトペアを初級にするなど、レベル分けにやや無理が見られる。
5. 「ごろごろ」「ばたばた」などの多義オノマトペアの用法の関係について図示された部分は興味深いですが、多義性のオノマトペアの教育方法が具体的には論じられていないのは残念である。
6. 「基本オノマトペ」70 語を指導すべき学習対象者が不明である。その意味でも、選定にもちいた 8 種類の文献中に年少者の基本語彙の文献が含まれていることの意義は何なのか。
7. 「基本オノマトペア」のリソース化資料から教材開発の方向性までは検討されていないが、本研究の調査から明らかになったように、インフォーマント間にもオノマトペに対する認識のずれがあり、リソースをどのように活用するのかという点については、なお議論の余地がある。
8. オノマトペの教育論に入る前に一般的な語彙教育と比較して、オノマトペ教育にはどのような特徴や問題点があるかについても、まとめて述べるべきであろう。